結びとして

冒頭の平田氏の「結論」で問題になるのは、四と五の項である。源平盛衰記は平田氏の通りかと思われるが、当道系諸本には材料になったかという箇所もある。これらの本以外では、延慶本が『吾妻鏡』に接するようで、内容的には異を唱えているのが印象に残っている。四部合戦状本では、重衡の酒宴や貞能の宇都宮下向に根源性を感じるところがあった。壇の浦以後の平家方の人物には唱導説話が「平家物語」では絡まっていると感じた。

なお、本稿で主に対象とした「平家物語」は、延慶本、四部合戦状本、源平闘諍録、屋代本・覚一本であった。

（注一）平成二年六月発行。以下、平田氏のものは全てこの本によったので、特に注記していない。

（注二）以下の見出しは、全て平田氏の大著の見出しによっている（筆者の判断で取捨している）。

（注三）昭和六十二年十二月発行。以下（九）が出てくるまでは、全てこの〔語釈〕と〔考察〕である。特に注記していない。

（注四）「頼政説話について」（『文学』昭和四七年七月・八月）。

（注五）「延慶本『平家物語』の資料受容の一側面―以仁王令旨をめぐって―」（『中世文学』昭和六〇年五月）。

（注六）平成八年十二月発行。以下の評釈は、全てこれからの引用である。特に注記していない。

（二〇〇二年十月一日受理）

し、宇都宮に預けられたとある。

「平家物語」の記事の相違は、帰って来た宇都宮達の話などが反映した結果であろうか。四部合戦状本は『吾妻鏡』に合致する場面を描いているが、延慶本は全く異なる。

義朝の遺骨の鎌倉到着

この項目も、平田氏の次の考察が参考になる。

『平家』諸本には文覚が遺骨を頸にかけて下さ〈ママ〉ったとあるが、文覚は下向せず、その門人が頸にかけて下ったのであり、それとともに江判官公朝が勅使として下った。『吾妻鏡』はこれらのことを他の記録により記したのである。なお延慶本・盛衰記はこの年のことであることを明らかに記してなく、南都本・覚一本のみが今年八月のこととして、編年の姿を伝えている。その内容は延慶本・盛衰記・南都本・覚一本はほぼ同様であるが、盛衰記が勅使公朝の下向を記しているのは『吾妻鏡』による書入れである。

「平家物語」諸本は、紺掻男の手柄話を取り込み、文覚を行き来させるなど、説話性・物語性が強く、『吾妻鏡』と大きく異なっている。

六代の宥免と文覚

この項目では、六代と土佐守宗実が主に取り上げられている。

六代が捕らえられた場所は、『吾妻鏡』と「平家物語」諸本は一致している。しかし、六代の宥免は、『吾妻鏡』では文覚の弟子が鎌倉に下って頼朝と交渉して決まったのであるのに対して、「平家物語」では文覚自身が往復することになっていて、前項の義朝の遺骨の記事と同傾向を見せる。

宗実の件は、『吾妻鏡』では左大臣経宗が手紙を頼朝に寄せて折衝しているのだが、「平家物語」では養家から出されたことになっている。「平家物語」は、俊乗坊重源譚が影を落としていると見られる。

丹後侍従忠房については、「平家物語」が詳しく、しかも、彼の死が謀殺であったことをはっきりと書いている。これは、六代と同じく文覚の周辺が関わっているからではないか、という気がする。

長谷部信連の源氏参向

この項目については、平田氏に次のような指摘がある。

この記事が延慶本・四部本に見えないのは、信連が宇治合戦で以仁王とともに戦死した話を作為していることによる。信連が文治二年に頼朝に参向して御家人となったこと、能登国大屋庄を賜わったことは、『吾妻鏡』と『平家』の諸本と一致して密接な関係が認められる。

平田氏が右で指摘している『平家』諸本は、長門本・源平盛衰記と覚一本などの当道系諸本とみられるが、これらの諸本は、『吾妻鏡』の影響を受けていると、筆者は考える。延慶本・四部合戦状本が『吾妻鏡』と異なるのは、非常に興味深い。

征夷大将軍任命の勅使下向

この項目について平田氏は、「この条は『平家』では、寿永二年九月のこととして記されているが、実は勅使中原康定が同年十月の第二回の下向のとき頼朝に東海東山両道の征討権を与えられた宣旨を持参したことを征夷大将軍に任命された宣旨を持参したことに作為したものであることは、第六篇において詳論した」とし、建久三年の征夷大将軍任命の時の記事を比較した後、「この条の三浦義澄が除書をうけたこと、工藤祐経が馬を引いたこと、また頼朝から馬十三疋、紺藍摺布百端をうけたこと等の一致により、『吾妻鏡』と『平家』の記事は密接な関係があることが認められる」としている。『平家物語』は、木曽義仲よりも早く頼朝に征夷大将軍を与えることによって、頼朝の正統性、征夷大将軍の権威を確保しようとしたかと考えるのだが、平田氏の指摘の通り、建久三年のことをうまく利用しているようだ。

余り記していない。なお、ここは、延慶本・長門本・四部合戦状本がほぼ同文である。

一条忠頼の伏誅

この項目は、『吾妻鏡』と延慶本・源平盛衰記にのみある。『吾妻鏡』と延慶本などとは、酒宴が設けられたこと、工藤祐経が最初の役を務めたことは一致しているようだが、その後は全く異なる。しかも、延慶本などの「宮藤次資経」という表記は祐経と受け取られるかどうか。ここは、北条父子の甲斐落ちに近い書き方で延慶本などは書いている。先の甲斐に関する部分は、延慶本の編著者には面倒なところだったのであろうか。

宗盛父子の関東下向

この項目については、平田氏が次のように整理している。

義経と頼朝の応対の記事は、『平家』の諸本の間に大きな異同がある。まず、対面の有無について、

イ、延慶本・長門本は、義経が頼朝に体面したが、打ちとけたる気色がなく、さらに鎌倉から出されたとし、盛衰記は対面したが、頼朝は打解けたる気色がなく合戦のことも申出すに至らなかったとしている。

ロ、南都本・覚一本は義経が鎌倉に入ったが、頼朝は景時らに宗盛を受け取らせたのち腰越に追い帰したとし、屋代本も頼朝が義経に対面しなかったとしている。（覚一本巻十一は南都本巻十二と系統が等しく、屋代本と相異している。）

に分かれ、また義経の腰越状について、

イ、延慶本・盛衰記・屋代本　　なし

ロ、長門本・南都本・覚一本　　あり

に分かれる。『吾妻鏡』は頼朝が酒匂駅において宗盛父子を受け取ったのち義経の鎌倉に入るのを許さなかったので、義経は腰越駅に滞在して腰越状を書いたとし、この立場は南都本・覚一本に近い。

平田氏は「立場は南都本・覚一本に近い」としているが、『吾妻鏡』は鎌倉に入れていないので、筆者には相当の差と見える。頼朝と宗盛との面会は、『吾妻鏡』では帰洛を前にしてだが、延慶本・屋代本などでは鎌倉に入って直ぐとなっている。又、『吾妻鏡』の頼朝の宗盛に対する言葉には、延慶本にある「又生ムヤ（ママ）思食召ス死ントヤ思召ス」といった意地の悪い言葉はない。屋代本は、ここは『吾妻鏡』と等しい。しかし、屋代本は、平家を攻めることになった理由として「悪行過法」という表現を使っていて、延慶本より『吾妻鏡』に近いとも言いがたい。

平貞能の宇都宮下向

この項目についても、平田氏に詳しい考察がある。

延慶本・盛衰記・南都本は宇都宮らが宗盛に随行しようとしたが宗盛の好意により帰国したとし、長門本・四部本は宗盛が宇都宮らを斬ろうとしたが貞能の諫言により助命されて帰国したとし、屋代本・覚一本はその命乞いをしたのを平知盛等としている。長門本・四部本が『吾妻鏡』と類似し、「原平家」の形を伝えているであろう。それ以外の諸本では貞能が宇都宮を頼む深いつながりが出てこないのである。貞能が平氏の陣営から離脱した「西海合戦不敗以前」とは寿永二年十月、平氏が九州を去って讃岐に赴いた際のことであり、盛衰記が「西国ノ軍破レテ」とし、あるいは屋代本・覚一本が寿永二年七月、平氏の都落ちの際に東国に下ったとしているのは誤りである。なお延慶本には巻十二に「肥後守貞能預観音利生事」との説話をのせ、そののちかれは紀州にかくれていたが捕えられ、鎌倉に下されて由井浜で首を切られようとしたとき、頼朝は観音から赦免せよとの夢を見て、死罪を許

「恒例神事」を一条に立てているのは共通の誤りで、その密接な関係を示している。『吾妻鏡』はこれを二月二十五日の条に記しているのに対して、延慶本・長門本・盛衰記は十二月の末尾に記し、盛衰記はこれに十一月日の日付を入れている」という指摘に尽きている。

重衡の東下物語

この項目の場所・日時の異同については、平田氏が次のように纏めている。

この条の記事は、頼朝と重衡の対面の物語、千手と重衡の酒宴の物語の両条からなっている。延慶本がこれをともに伊豆国府でのこととしているが、それ以外の諸本は、ともに鎌倉で行なわれたこととしている。物語の内容はいずれもほとんど同じであるが、闘諍録と屋代本は千手物語を欠いている。

日付については延慶本は三月二十六日のこととし、翌二十七日に鎌倉に入ったとし、長門本は二十八日に鎌倉に入って頼朝と対面、二十九日に千手との酒宴があったとする。四部本は日付がなく、鎌倉に入った翌日頼朝と対面、同夜千手との酒宴があったとしている。闘諍録・屋代本は日付なく、鎌倉に入った日に頼朝と対面したとしている。（中略）覚一本は日付なく、鎌倉に着いた日に対面し、狩野介にあづけられたのち、千手との酒宴があったとしている。これら『平家』諸本の記事に対して、『吾妻鏡』では二十七日に伊豆国府に到着した時、頼朝は北条におり、景時の報告を聞いて直ちに北条に相具さしめ、翌二十八日に対面したとしている。また伊豆から鎌倉に着いたのは四月八日であり、千手との酒宴は同月二十日夜のこととなっている。

千手との酒宴について『吾妻鏡』は、藤判官代邦通、工藤一臈祐経が同行したとし、その祐経は鼓を打って今様を歌ったことになっている。一方、邦通は、酒宴後、酒宴の様子について頼朝に答えている。これは、「平家物語」と全く異なる。又、『吾妻鏡』では五常楽も皇麞急も主に重衡が吹いたように記されているが、これも「平家物語」と異なる。ここは、当道系諸本は、千手が五常楽を弾き、次いで重衡が皇麞急を弾くことになっている。一方、延慶本では、千手の説明で五常楽、皇麞急、廻骨と続き、最初は千手が弾き出したが、廻骨は重衡一人で弾いている。一方、四部合戦状本では廻骨だけが告げられている。『吾妻鏡』によれば、重衡は五常楽を後生楽、皇麞楽を往生急と呼んで、その覚悟を暗示したとのことで、これは当道系諸本の記事をそのまま採り入れている。しかし、延慶本は、そのような言葉を記さず、重衡と千手の拍子が合わず、千手が琴を止めるということを記すことによって、重衡の切迫した姿を示そうとしたかと見られる。なお、当道系諸本は廻骨には言及しない。酒宴後頼朝の問いに答える人物を、延慶本・四部合戦状本は大膳太夫広元、当道系諸本は斎院次官親能とする。又、延慶本・四部合戦状本は、この頼朝との会話によって酒宴の様子が具体的に示されることになっている。重衡の覚悟を語るという点では、『吾妻鏡』は、延慶本・四部合戦状本のものと当道系本のものとを合わせて、強調した恰好とも言いえよう。

平頼盛の鎌倉下向

この項目について平田氏は、「『吾妻鏡』は帰洛の日時を「原平家」によりつつ、下向した日を記さず、五月十九日の条にただ「此程在鎌倉」と記している。『平家』の諸本によると、頼盛の大納言への還任と庄園の安堵は頼盛が鎌倉滞在中に、いわば手土産として行なわれたものであり、『吾妻鏡』もそれと同じ立場で、六月五日帰洛の条に「武衛令辞庄園於亜相給」と記している」と整理している。ここに記されている手土産の外に、『吾妻鏡』と「平家物語」とで内容のほぼ一致するのは、弥平左衛門宗清のことである。『吾妻鏡』には、頼盛への持てなしが具体的に記されたところもあるが、「平家物語」はそれらを

じる面をここでももっていることになる。

重忠達を取りなした人物についても『四部合戦状本平家物語評釈』の〔語釈〕に「〈延・長・盛〉では、このことをどのようにはからうべきかと頼朝に諮問を受けた常胤・実平が答えたとする。『吾妻鏡』の治承四年十月四日条では「不被抽賞有勢之輩者、縡難成歟」と恐れる頼朝が、三浦一党に「存忠直者更不可胎憤之旨」を仰せ含めたとする。その点、頼朝の命を遮るように、半ば威嚇に近い形で成清の発言を記す〈四〉の場合、この後の成清称揚のあり方に呼応させようとするのだろう」とある。源平闘諍録は義澄としていて、諸本で人物を異にしている。

時政父子の行動について、『吾妻鏡』は、甲斐国に赴いたのは九月八日とするが、延慶本などは安房に渡らず、甲斐国に落ち延びたような表現になっている。四部合戦状本は、安房に渡ったとする一方で、甲斐国に赴いたという異説をも併記している。『吾妻鏡』八月二十四日の時政の複雑な行動を最初の動きですませたのが延慶本など、そこを省略して安房に渡るところのみを記したのが四部合戦状本と見なすことが出来る。なお、源平闘諍録には該当する記事がない。

最後に、『吾妻鏡』の記す長尾新六定景の厚免については、『四部合戦状平家物語評釈』の〔語釈〕に「〈四〉は、景久の法華経転読譚として構成するが、〈闘・盛〉は、長尾新五の話として記す（〈闘〉は、法華経転読の件不記）。この問題については、武久堅が、以下の二点を指摘して、〈四〉は、本来〈盛〉のように長尾五郎の話だったものを、俣野の話に改作したものとする」と整理されている。延慶本にはこの記事はなく、『吾妻鏡』とはここでは遠い。

富士川の合戦と維盛の帰京

この項目について平田氏は、「水鳥の記事のほか、頼朝の精兵二十万騎とあり、また甲斐・信濃の輩二万余騎が参加したことも一致し、さらに二十四日を矢合せの期としたことが「原平家」に見えていたことは前に明らかにしたが、このことも『吾妻鏡』と一致し、これは史実としては十九日か二十日のことと考えられるのである」と記している。なお、甲斐の武田源氏の活躍について、佐伯真一氏に「富士川合戦そのものの勝利も、或いは平家の背面を突いた武田軍の攻撃によるのではないかと、『吾妻鏡』からは読みとれる。しかし、平家諸本はこの点にあまりふれず、〈闘・盛・南・覚〉が武田信義・安田義定・一条忠頼等への勧賞を記す程度である」という指摘が『四部合戦状本平家物語評釈（九）』「富士川」の〔考察〕にある。

頼朝と義経の黄瀬川の対面

この項目についても平田氏に「対面の日時について、延慶本・長門本は富士川合戦の前のこととし、四部本・闘諍録・盛衰記・南都本は後のこととし、『吾妻鏡』は後者と立場を等しくしている。また頼朝との対面の際の話題の中心は、延慶本・長門本・四部本は秀衡の義経援助のことであり、闘諍録・盛衰記・南都本は義家・義光兄弟の対面の際のことに類似しているということであり、『吾妻鏡』の記事はこの両者を含んでいる」という整理がある。但し、秀衡の義経援助については、『吾妻鏡』では抑留しようとしたことが記されてい、延慶本・四部合戦状本などの頼朝の挙兵に好意的な秀衡とは相当の開きを感じる。義家・義光の物語は『古今著聞集』にあるが、それに最も近いのは『吾妻鏡』である。延慶本・四部合戦状本などに見える項羽・沛公への準えについては、『四部合戦状本平家物語評釈（九）』「義経来会」の生形氏の〔考察〕に「中国の故事を盛んに採り上げて歴史を説明しようとする唱導文芸の場を想像させる」とある。

頼朝の朝務言上

この項目については、平田氏の「延慶本・長門本・盛衰記の記事は小異があるが、ほとんど一致し、ことに第三条の「諸社事」の中の

という詳しい説明がある。平田氏は、更に『六代勝事記』の記事について「三浦一族と頼朝が海中で出合ったとしているのは『平家』と同じ説であり、頼朝が土肥実平一人を具し、岡崎義実らと同船していないとすることは『吾妻鏡』と一致している」とも説明している。また、『四部合戦状本平家物語評釈（九）』「三浦の人々、頼朝に尋ね合ふ事」の〔語釈〕には延慶本等と四部合戦状本との関係について「頼朝の安房への船出は、三浦が頼朝を尋ねて安房へ落ちたとの報を実平の室が、使者を遣わして知らせたからであったとする。〈四〉の場合は、次項にも見るように、それら詳細な記事を略してしまったのであろう」という指摘がある。なお、『吾妻鏡』には、実平の室の知らせは出てこない。更に、『四部合戦状本平家物語評釈』「頼朝、安房国落ち」の〔語釈〕には、「〈延・長・盛〉では、遠平が出航を遅らせようとして、父実平に疑われたとする。〈四〉の場合は、実平が遠平を疑う形を取ることにより、遠平を下船させようとする」「『吾妻鏡』治承四年八月二十八日条によれば、頼朝は安房落ちに際して、遠平を御台所政子のもとに遣わし安否を知らせている。これと同様の伝承を受けて、遠平に政子を尋ねるように命じた叙述と読むわけである」という解釈が示されている。筆者もこの解釈に賛同したい。四部合戦状本は『吾妻鏡』に近いところも相当にある。

（ヘ）千葉介常胤・上総介広常の参上

この項目に付いて、『四部合戦状本平家物語評釈（九）』「東国の武士、頼朝の許に参る事」の〔語釈〕に「『吾妻鏡』では安房の滞在が長く描かれ、安西景益が重視される一方、広常には厳しく、常胤の参向も遅く描かれる。一方、『平家物語』諸本では常胤・広常が重視され、〈闘〉や千葉氏関係資料では広常も早くから参陣していたように描かれる。しかし、安房到着直後、洲崎明神参詣より前に常胤等が参向したとするのは、〈四〉及び妙本寺本『曽我物語』のみか。」という纏めがある。このことに関して佐伯真一氏は、「『平家物語』古本は、やや千葉氏寄りで、広常を実情よりも軽視する立場で記された資料を採り入れ、延慶本や長門本は、その姿を良くとどめているのではないか。そうした本文を材料として『吾妻鏡』は広常排撃の立場から、闘諍録は千葉氏称揚の立場から改作を加え、各々、広常に対しては一層厳しい叙述を形成した（特に『吾妻鏡』）。一方、広常や千葉氏と利害関係のない、おそらくは都周辺で編集された四部本・盛衰記共通祖本は、『玉葉』や『愚管抄』などと同様、むしろ客観的な広常評価を見せている」と、〔考察〕で評している。

上総権介広常の話の中に平将門と藤原秀郷のことが出てくるなど、『吾妻鏡』と延慶本などの「密接な関係」が確認される。源平闘諍録に初めて相当する記事が出てきたが、『吾妻鏡』・延慶本とは大きく異なる内容である。

（ト）江戸重長・畠山重忠の参加

『吾妻鏡』は、葛西三郎清重を「源家に忠節を抽んづる者」とする一方で、江戸太郎重長を十月二十九日まで「景親に與せしむるに依りて、今に不参」と記す。しかし、「平家物語」の延慶本・源平闘諍録は二人が一緒に墨田川に馳せ参じたとする。なお、四部合戦状本は清重も端役扱いであり、江戸氏は名前すら出ない。

墨田川の渡河を、『吾妻鏡』は常胤、広常等の船筏に乗ってとするが、「平家物語」では浮橋を作らせて渡ったことになっている。橋作りを命じられた者を、延慶本は重長、源平闘諍録は清重と重長、四部合戦状本は「角田笠井の人々」とする。『四部合戦状本平家物語評釈（九）』「東国の武士、頼朝の許に参る事」の〔語釈〕に「〈延・長〉のように浮橋築造を命じられたのが江戸のみであるとすれば、こうした前歴に対するペナルティとも解釈でき、江戸と葛西の扱いには差があったかもしれない」という考えが示されている。延慶本は『吾妻鏡』に通

筆者は、『吾妻鏡』が助力を求める手紙を託しているのに対して、延慶本・長門本は最初から助力しないと見なしているので、違いがあると考える（大同小異ではあるが）。なお、四部合戦状本は右の考察などから「粗略な略述」と考えられている。

（八）山木の夜討ち

この項目について平田氏は、「この記事は延慶本・長門本と『吾妻鏡』とが一致するところが多く、『吾妻鏡』が史料にしている「原平家」は同系のものと推定される」と結論付けている。前項の「佐々木兄弟の参加」と同様に『吾妻鏡』と延慶本・長門本とは、多くの点で対応が認められるのであるが、『吾妻鏡』では援軍として加藤次景廉、佐々木三郎盛綱、堀藤次親家などが追加されたとするのに対して、延慶本・長門本では景廉一人が自ら駆けつけようとしたという書きぶりになっている（勿論、頼朝から太刀を渡されることにはなるのであるが）。

（二）石橋山合戦と小坪合戦

この項目の石橋山合戦及び三浦一族の遅参の記事は、平田氏も指摘しているように、延慶本・長門本と『吾妻鏡』とが一致している。平田氏は、右の指摘の後、

『平家』は三浦義明に藤九郎盛長が廻文をもっていったことを八月二十日としているが、『吾妻鏡』は同条の波多野右馬允・滝口三郎経俊のことを七月十日にくりあげているのと同様に、これ以前のこととしていて月日を明記せず、かわりに義澄が六月廿七日に参向していることを記している。合戦の経過についても、参加した御家人の奮闘についてもほゞ一致しているが、相違していることも若干ある。

として、放火の主体が「平家物語」では大庭景親、『吾妻鏡』では三浦一族と反対になっていること、人数の分散を主張したのが「平家物語」では頼朝、『吾妻鏡』では土肥実平となっていること、「平家物語」では八幡大菩薩に祈念しているが、『吾妻鏡』では正観音像を岩窟に安置したとなっていることを挙げている。又、「『吾妻鏡』に萩野五郎俊重を十一月十二日、石橋山合戦のときの無道により斬罪に処したとあるが、『吾妻鏡』の合戦の条に見えず、『平家』には見えている。」ということも指摘されている。なお、四部合戦状本については、早川厚一氏に、「〈四〉に見る頼朝の安房落ち以前までの記事は、前段の院宣拝受記事に続けて、その院宣を戴いて戦った石橋合戦について、その椙山入りまでを、佐々木の逸話を取り込んで簡略に記し直そうとしたものである」、「〈四〉に見る特異な七騎落説話は、本来は実平父子の恩愛と、頼朝の恩情を語ろうとするものであったろう」という〔考察〕がある。

なお、『吾妻鏡』には、箱根山別当行実の手柄が挟み込まれているが、延慶本には無い。これなどは、『吾妻鏡』と延慶本の関心の違いという他ないだろう。

（ホ）衣笠合戦と頼朝の安房到着

この項目は、平田氏に「延慶本・長門本と『吾妻鏡』はほぼ一致し、四部本も簡単であるが、原形が延慶本らと近いことを示している」という指摘がある。

衣笠合戦は平田氏の指摘の通りだが、三浦介義明が「イカニモ安房上総ノ方ヘソ落給ヌラム」と示唆したということは、『吾妻鏡』には見えない。

頼朝の安房到着関連については、平田氏に「『平家』では安房に赴いた三浦義澄等が途中で出会った船に、岡崎義実等がいて、頼朝を船底にかくし、その安否を不明といっていたが、やがて頼朝が現われて三浦一族が感悦したとしているのに対し、『吾妻鏡』では三浦一族が出会った船に北条時政父子と岡崎義実がいて安房に到着、頼朝は翌二十九日に実平と小船で到着して、北条父子らの出迎えをうけたとある」

を史料としたということは明白である。（中略）『吾妻鏡』には十月、頼朝が鎌倉に落付いた後に行なった波多野義常、山内経俊の処分についての詳細な記事があり、これは幕府に存した記録によるもので、「原平家」の記事の利用もこれと合わせたものであろう。

頼朝の挙兵の準備は七月に入ってから積極的になったのであり、「原平家」はこれを作為した院宣の下附によって理由づけたのであるが、『吾妻鏡』は「原平家」の院宣説を否定するとともに、頼朝の時勢観の上に基づいているとしている。

頼朝に従った御家人については、『吾妻鏡』と延慶本・長門本が近い。延慶本・長門本にあって『吾妻鏡』に出て来ない人物は、城、筑井、新開、飯田、大沼、多毛、丸、安西といった諸家の人々であるが、『吾妻鏡』にのみ出てくる人物は北条、加藤、堀、天野各家の人の追加とも見なすことが出来る。波多野義常、山内経俊の件については、『吾妻鏡』は頼朝にそれぞれが許されるところに焦点があるかと思われるのであるが、延慶本は二人が召喚に応じなかったところを写し出す。二人の中では、山内経俊の悪口が特に具体的に描かれている。この項では、『吾妻鏡』と延慶本は確かに共通するところがあると認識させられるのであるが、その反面、その違いもまたはっきりしている。

（ロ）佐々木兄弟の参加

これについては、『四部合戦状本平家物語評釈（九）』[注六]「頼朝、安房国落ち」の次の〔語釈〕が詳しい。

『吾妻鏡』は、次のような経緯を記す。

①八月九日、景親、懇意な佐々木秀義に、頼朝の謀叛が露見しかっていることを知らせる。景親は在京中に、謀叛を平家に報じる長田入道の手紙を、上総守忠清から見せてもらったのである。

②八月十日、秀義の嫡男定綱、頼朝に通報のため出発。

③八月十一日、定綱の報を頼朝聞き、四月（以仁王挙兵）以来心に秘めていたことを語る。

④八月十二日、兼隆襲撃を十七日と定める。岡崎義実、義忠父子を参向させるべく使者を派遣。

⑤八月十三日、定綱、十六日に帰参を約し帰国。

⑥八月十六日、戦勝祈祷。佐々木兄弟の遅参に頼朝焦慮。

⑦八月十七日未刻、佐々木兄弟到着。夜討決行。

〈延・長・盛〉では、①②は同。但し、②の日付を欠き、③の日付も明記しない。但し〈長〉は、「十二日さたつなはせまいりて申けれは」と、十二日に頼朝のもとに着いたかのように記すが、この後の文脈からすれば、〈延〉「十二日定綱帰来テ」のように、十二日は帰参の日とするのが自然。なお、〈延・長〉では、頼朝は佐々木の報に「先立テ聞タルナリ」（〈延〉）と答えている。以下、〈延・長〉では〈延〉が⑤を十二日のこととする以外は、⑥⑦含めて『吾妻鏡』に同。一方、〈盛〉は、この記事の前に、頼朝に召集された重代の家人等が、忍んで参集したことを記す記事の中で、頼朝挙兵の噂を聞き、京都から盗み取った馬に乗り駆けつけた佐々木四郎高綱のことを記す（宇治川合戦同様、これも馬にまつわる話である）。その高綱が、頼朝の命を受け兄弟を呼び集めたとする記事の後に本話を記すため、⑤以下の記事はなく、十七日午の刻に、頼朝は定綱を召し、兄弟を集めて夜討の準備に備えるよう言ったとする。これらに対して、〈四〉は、秀義が得た情報源を記さず、通報のあったその日に夜討を決行したとすることからも、佐々木兄弟の遅参の件が記されないのは当然だが、準備も当然不十分なままでのその日の内の挙兵というのは余りにも無茶である。

渋谷庄司の件について平田氏は「吻合している」とするのであるが、

な記述を欠いているのである。（中略）公家の日記にはこれより頼朝が謀叛人として叙述され、『平家』は編年記事においてはそのような立場での叙述が続けられているのであるが、本文中にこのように潜かに院宣をうけていたと叙述することによって、鎌倉時代の頼朝の立場をここに確立しているのである。しかし『吾妻鏡』は『平家』の前条とこの条をあわせて資料とし、また関東の所伝によって、二十七日条を記して院宣説を削除したのであり、それはまた『愚管抄』の立場とも一致するものである。

『吾妻鏡』の令旨を拝受する態度と延慶本の院宣を拝受する態度とが特に近いようである。院宣説は『愚管抄』にも見えるものだが、「平家物語」がこちらを主にする姿勢を取っていることは、味わい深い。院宣は、頼朝一人に与えられたものだし、文覚が関わっていることでもあるし、「平家物語」に極めて都合の良い説ではなかろうか。

平等院の合戦

この項目で関東に関係するのは「宇治合戦における足利又太郎忠綱が一番に馬で渡河した物語と、律静房日胤の討死の物語」とである。

忠綱渡河の物語を関東記事として取り上げたのは、この話が野木山合戦の条に出て来るからである。この記事について平田氏は次のように考察している。

関東武士の間においては、足利又太郎忠綱が宇治河を渡った話は著名なことであり、それが『平家』のよった合戦物語に記せられていたので、『平家』は『吉記』を基にするとともに、これをも記したのであろう。『吾妻鏡』は『平家』によって、この合戦を記したのに、忠綱の功名を記さなかったのは、足利忠綱が頼朝に敵対して、この合戦に参加したので、その功名談をこゝに記さず関東に存する史料によってその末路を記した条に附記するに止めたのであろうと思われる。

関東武士の間では忠綱の渡河は著名なことであったという平田氏の指摘に従いたい。但し、その他の成立に関する説については、例の通り保留として置く。

日胤の討ち死にについては、『四部合戦状本平家物語評釈（七）』「宮誅されたまふ事」の〈語釈〉に次のように整理されている。

『吾妻鏡』では、霊夢の翌日、高倉宮の三井寺入寺を聞き、日胤は、頼朝の願書を日恵に預けて宮のもとに向かって討死したとし、〈延〉は、使者を頼朝のもとへ下し、自らは三井寺に向かって討死したとする。また〈長・盛〉は、日胤自らが伊豆へ下って頼朝に報告し、その後京に戻って宮の軍陣に加わって討死したとする。〈四〉の場合は、三井寺に事が出来したと聞き喜んで駆け付けたものの、霊夢に示された吉が起こらず以仁王の蜂起は失敗したため、日胤は、六百日で止めていた千日参籠をさらに続けて宿願を果たすため八幡へ落ちたとするのであろう。

また、〈考察〉の中で早川氏は、「〈延・長・盛〉が、〈四〉とは異なり、この後の戦いで討死した日胤の夢見に謝して、頼朝が園城寺に勧賞を施したという、報恩譚の形式を取っていることである。」と指摘している。日胤が千葉介常胤の子息であったことは『吾妻鏡』だけに出てくる。『吾妻鏡』では、頼朝は以仁王の蜂起に相当に係わっていたことになる。

頼朝の挙兵物語

（イ）頼朝の挙兵の準備

この記事は、延慶本・長門本・源平盛衰記にのみある。この記事と『吾妻鏡』の記事について平田氏は、次のように考察している。

八月二十日、山木合戦ののち頼朝が伊豆相模御家人四十六人を従えて、土肥郷に到ったということは、『吾妻鏡』と「原平家」が一致し、八代説を再編した立場によると、『吾妻鏡』が「原平家」

か記さない。従って、延慶本では、頼朝から国々の源氏に施行状が発せられることになっている。行家の北条館到着については、平田氏が次のように整理している。

『吾妻鏡』は令旨を「四月九日」としているが、延慶本は「四月日」とし、長門本は「五月九日」とし、盛衰記のみが『吾妻鏡』と合致している。また延慶本・覚一本には行家が四月二十八日に都を発ち、五月八日あるいは十日に北条の館に下り、頼朝に令旨を奉ったとある。盛衰記のみは四月十日夜半に発ったとし、これは二十七日に頼朝の許についたとする『吾妻鏡』の立場と一致する。（中略）『吾妻鏡』編纂の際に、幕府に四月九日に以仁王が散位宗信に仰せて令旨を下されたこと、また四月二十七日に行家が北条館を訪ねて頼朝に令旨を渡したことの史料、あるいは伝承が存し、これによって「原平家」の記事を修正したものと考えられる。

平田氏が示している「史料、あるいは伝承」というのは、『吾妻鏡』十月二十七日の記事に見えるものであろう。「原平家」との関係は置いて、他は平田氏の指摘の通りである。

令旨本文については、早川厚一・佐伯真一・生形貴重三氏による『四部合戦状本平家物語評釈（七）』[注三]「相少納言伊長の事」の〔語釈〕に、

〈延・長・盛〉は令旨本文を掲げる。また〈延・長〉は、頼朝が諸国の源氏にあてた施行状も収め、さらに〈盛〉はそれらに加えて頼朝あての別令旨をも収める。令旨本文は『吾妻鏡』にもあるが、〈延・長・盛〉を含め各々本文小異。

とある。「各々本文小異」とあるが、筆者の見るところでは、『吾妻鏡』と延慶本のものは、冒頭部は小異だが、その後は大異である。そして、長門本・源平盛衰記のものは、延慶本の前半に『吾妻鏡』の後半を接ぎ木したものである。また、源平盛衰記の別令旨については、赤松俊秀氏に「令旨は冒頭が「下　東国源氏並官兵等所」となっており、頼朝にあてたものでなく、頼朝を大将軍として参洛を東国源氏に命じたものである。頼朝にあてて下されたものでないことは確実である」という指摘がある。[注四]なお、別令旨を記したのは、源平盛衰記の編著者が、延慶本のあり方や物語の展開から頼朝を押し出す必要があると判断したことを物語るものであろう。更に、延慶本の施行状や宛て名について、安藤淑江氏は令旨をうけて直ちに挙兵しようとしたことを描くためと考えているが、[注五]筆者は、延慶本は頼朝を源氏の中心として描く意図があるためと考える。延慶本が『吾妻鏡』よりも頼朝を押し出していることには注意する必要があろう。また、『吾妻鏡』と延慶本とにこのような違いがあることに注目すると、原平家物語と『吾妻鏡』の関係も直ちに結論は出し難い。

なお、四部合戦状本は「令旨を諸国に下されけり」とのみあって、右に記して来たようなことには一切触れない。四部合戦状本が当道系諸本以上に令旨に冷淡であることも興味深い。源平闘諍録と屋代本は欠巻となっている。

頼朝の令旨拝受

この項目については平田氏が次のように纏めている。

『吾妻鏡』四月二十七日の条の頼朝が令旨を拝受する態度は、『平家』諸本に頼朝が後白河法皇の院宣を拝受して挙兵を決意したとあることと同様に記述され、この記事において両書に密接な関係が存することが認められる。すなわち『吾妻鏡』は院宣の拝受を虚構として採用しなかったが、院宣拝受の状況を以仁王の令旨を賜ったときのこととして、「原平家」の記事を採用しているのである。『平家』は院宣を以て頼朝挙兵の動機とし、『吾妻鏡』は令旨を以て挙兵の動機としているので、それぞれを頼朝の拝受の際について同じような記述をし、『平家』は令旨拝受の条にはこのよう

『吾妻鏡』関東記事と「平家物語」

橋口晋作

『吾妻鏡』は、治承四（一一八〇）年の以仁王の挙兵から文永三（一二六六）年に宗尊親王が将軍職を逐われて上京するところまで記しているが、その成立は、十三世紀末から十四世紀初頭と考えられている。この『吾妻鏡』の記事の中、冒頭から建久十（一一九九）年に至る部分は、「平家物語」の時代に重なっている。この『吾妻鏡』の記事と「平家物語」の記述との関係について、平田俊春氏は、大著『平家物語の批判的研究』[注一]第八篇「吾妻鏡と平家物語との関係」の第五章「結論」で、

一『吾妻鏡』はできるだけ関係史料の蒐集につとめ、これを編集したのであるが、適当な史料がない場合は、「原平家」の記事を採用して、全体的記述を整えている。

二『吾妻鏡』は「原平家」の文学的作為を他の史料、あるいは幕府の伝承に従って修正しているところが少なくない。

三『吾妻鏡』は「原平家」の誤りを継承しているところも多くある。

四『吾妻鏡』が盛衰記を材料としているというのは誤りであるが、そのよった「原平家」は読み本系統の特長に一致しているところがある。なお盛衰記には『吾妻鏡』により増補書入れした部分がある。

五『吾妻鏡』が盛衰記とともにいわゆる『平家』、すなわち普通本あるいは語り系の本の『平家』をも別に材料にしているというのは誤りである。

と纏めている。この結論は、氏の大著の本文比較から導かれたものではあるが、筆者には、『吉記』・『百錬抄』という歴史資料との考証の流れに依っている面が大きいように見える。そこで、本稿では、関東の記事について、平田氏の対比、考察を、改めて「平家物語」との異同に焦点を据えて見直してみたい。直線的で、失礼でもあるが、お許しを請いたい。

頼政の以仁王への進言、行家の蔵人補任、以仁王の令旨[注二]

この項目で関東記事に相当するのは、令旨の使者となった行家、彼の北条館到着、令旨本文である。

行家については、『吾妻鏡』と「平家物語」で、次のような相違点がある。まず、『吾妻鏡』は陸奥十郎と呼び、「折節在京」と丁度居合わせたといった表現をしているのに対して、延慶本・覚一本は新宮十郎、「熊野に候十郎」と熊野との関わりを示す呼び名を記し、彼がたまたま居合わせたような表現をもたない（覚一本は熊野から呼び寄せたような表現になっている）。次に、行家が蔵人に任じられたことである。『吾妻鏡』は「八条院蔵人」と場所を限定しているが、「平家物語」は単に「蔵人」と記すだけである。なお、蔵人に任命された理由について、『吾妻鏡』や覚一本は特に記すことは無いが、延慶本では行家に「勅勘ノ身ニテ候ヘハ叶候マシ」と言いだされてとする。延慶本では行家は頼朝と相似た反応をした人物として描かれているのである。

行家の北条館到着であるが、その前に令旨の届け先の異同がある。『吾妻鏡』は「先づ前右兵衛佐に相觸るるの後其外の源氏等に傳ふ可き」としている。覚一本などはこの記事に相当するような行動となっているが、延慶本のみは「令旨ヲ持テ頼朝カ許ヘ下レ」と頼朝一人し